

八幡宮と大仏

・鶴岡八幡宮の創建・鶴岡八幡宮は、地理的に見ても鎌倉の平坦地の中央奥に位置し、中世都市鎌倉の精神的・信仰的中心となる存在。治承4年（1180）10月7日に頼朝は鎌倉へ入り、わずか五日後の12日に、先祖を祀るため「小林郷の北山」に由比ヶ浜の八幡若宮を遷す。由比の八幡若は、もともと先祖源頼義が石清水八幡宮から勧請。現在も由比若宮（元八幡）として存続。

・鶴岡八幡宮の場所・大倉御所の西北に隣接しており、御所を守る意味。近年の発掘調査の結果、境内の東端、現在の鎌倉国宝館の北の地点から、八幡宮創建の少し前の時代と思われる男女の有力者の墓が発掘された。宗教的な場か。

・八幡宮の建設工事・社殿は松の柱と萱葺きの屋根という粗略な造り。翌養和元年（1181）には、浅草から大工を招き本格的な若宮社殿を新築、梶原景時を奉行として遷宮を行う。

・放生会・幕府あげての一大宗教行事。放生会は元来、捕らえた生き物を放ち逃して功德を施す法会で、石清水八幡宮にならって頼朝が文治三年（1187）に鶴岡でも始めた。八月一日から法会当日までは東国一帯には殺生禁断の命令が幕府から出され、鶴岡放生会は「殺生禁断」という仏教的思想を借りて幕府が東国の支配者であることをあらためて知らしめるという効果。当初は八月十五日のみであったが、建久元年（1190）からは十五・十六の二日に拡大。五日には將軍参詣、経供養などの法会、社殿廻廊での舞楽など。

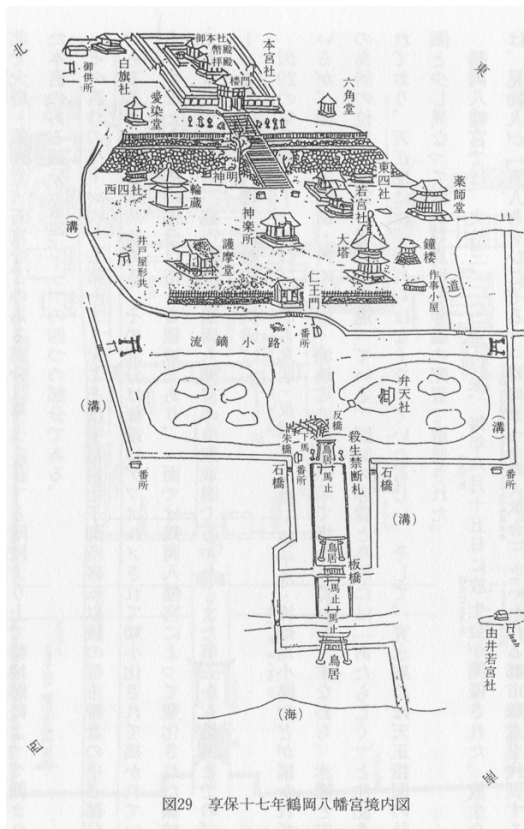


図29 享保十七年鶴岡八幡宮境内図

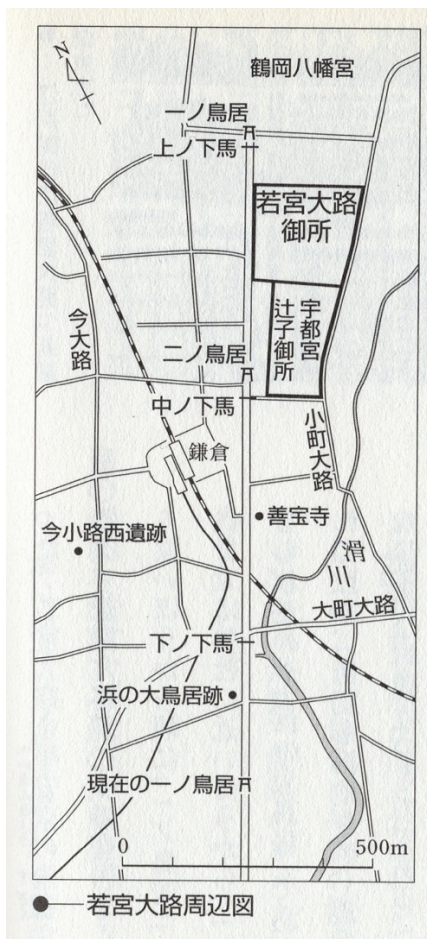
十六日は主会場が馬場（現在の流鏝馬馬場）に移り、将軍臨席のもと、流鏝馬、競馬など。流鏝馬は、石清水八幡宮放生会にはなく、鶴岡八幡宮放生会にて独自に取り入れられた儀礼で、御家人が武芸を披露する晴れの場でもあり、放生会の中心となった。

・神仏習合・・現在の鶴岡八幡宮は純然たる「神社」であるが、これは明治の神仏分離後の姿。明治以前は寺院と神社が一体となった「神仏習合」の形態をとり、「鶴岡八幡宮寺」とも呼ばれた。境内には寺院的施設も多く、最高責任者である「別当」は僧侶。

神の本来の姿は、「本地仏」と呼ばれるが、八幡の本地仏は一般に阿弥陀如来と言われる。ただし、鶴岡の本地はもともとは薬師如来であった可能性。薬師堂が本地堂と呼ばれる。石清水八幡宮でも創建時の本尊は薬師。

・供僧・・別当のほかに日常の社殿の管理や勤行・祈祷をつかさどる「供僧」と呼ばれる僧が二十五名。別当の住居である「別当坊」や、供僧の住居である「二十五坊」は、八幡宮の西北の谷、通称「御谷」と呼ばれる地域に存在。

・若宮大路の鳥居・・現在は、神社から遠いほうから順に「一ノ鳥居」、「二ノ鳥居」、「三ノ鳥居」と呼んでいるが、江戸時代までは神社に近いほうから「一ノ鳥居」、「二ノ鳥居」。一番南に立てられたのが「浜の大鳥居」。現在の石製の一ノ鳥居は江戸時代建立のもの。

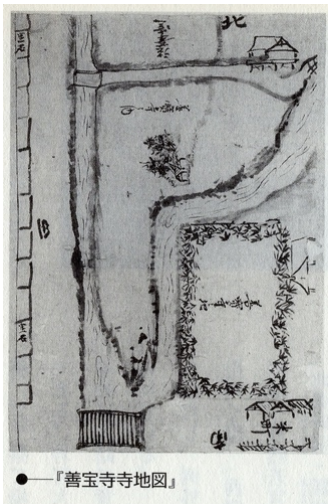


・戦国の浜の大鳥居・・・1991年に、若宮大路の西側歩道で、木を組み合わせた直径一・六メートルに及ぶ鳥居の柱が発掘された。この鳥居は天文二十一年（1552）に北条氏康によって再建された鳥居。発掘された浜の大鳥居は、下ノ下馬の一五〇メートルほど南、現在の一ノ鳥居よりは一八〇メートルほど北（八幡宮寄り）の場所。鎌倉時代には、浜の大鳥居で風伯祭が行われる。室町時代、鎌倉公方が毎年二月に浜の大鳥居を七度回る行事。

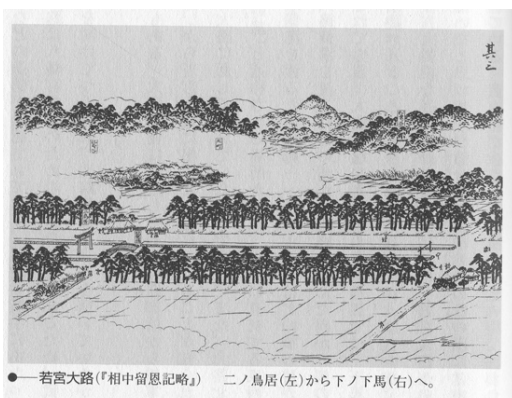
・若宮大路の整備・・・寿永元年（1182）、頼朝は妻政子の安産祈願のため、海岸近くから八幡宮へ至る直線の参詣道を造成。若宮大路へは、「下馬」と呼ばれる三ヶ所でのみ道が直交。若宮大路の通行者は、必ずいずれかの下馬を経て大路へ入る。三つの下馬は、北から順に「上ノ下馬」「中ノ下馬」「下ノ下馬」。上ノ下馬は、若宮大路の北端、三ノ鳥居前の横大路との交差点。中ノ下馬は、現在の鎌倉駅近くの二ノ鳥居付近。下ノ下馬は、大町大路との交差点で、現在の下馬四つ角。

・段葛・・・若宮大路の中央部に一段高く築かれた道で、將軍の参詣などの儀礼的通路。段葛という名称は、一段高く築いた道に、葛石（縁石）を置いたことによる。中世の史料で「置石」、「作道」などと呼ばれている。平安京においては、内裏への貴人の通路として一段高い「置路」というものが設置されており、若宮大路の置石（段葛）も、これにならったと考えられる。

・若宮大路の変遷・・・中世の絵図（『善宝寺寺地図』）

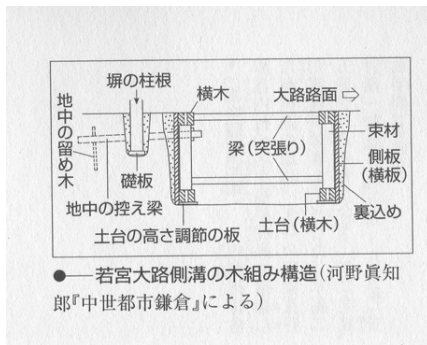


近世の絵図（『相中留恩記略』）



近代の若宮大路・・明治期に両側面に玉石を積む。大正期に梅・桜・つつじが植えられた。昭和初期に植え替えられた松が数本、現存。

・大路の発掘・・道幅は現行の道路幅よりも広い33.6m、東西両側にそれぞれ幅3m・深さ1.5mの側溝。側溝は箱堀状で、木組み構造によって崩れないように配慮されていた。



・謎の多い鎌倉大仏・・いつ完成したのか？ 現存の銅造大仏は文応元年(1260)から文永元年(1264)の間に完成か(北条時頼の時代)。

・素材と技法・・当初の大仏は金泥が塗られていた。青銅(銅に錫などを混ぜた合金)の彫刻の表面に金を施した仏像=金銅仏。奈良大仏と比較すると、著しく銅の比率が低く、鉛の含有率が高い。理由は不明。

・誰が作ったのか・・浄光という浄土系の聖が勧進(マネジメントや資金調達)。幕府もしくは北条氏(泰時・時頼)が支援したか。

・なぜ2回作られたか・・嘉禎4年(1238)に木造大仏・阿弥陀如来の造立開始(北条泰時の時代)。寛元元年(1243)に完成(経時の時代)。建長4年(1252)に大仏鑄造開始(時頼の時代)。木造大仏が倒壊？木造大仏は金銅大仏の原型？

・『吾妻鏡』に金銅大仏が「釈迦如来」と記されているのはなぜか・・現在の大仏は、印の形から阿弥陀如来。単なる誤記か。

・何のために作られたか・・阿弥陀如来は八幡神の本地仏であり、大仏は鎌倉の守護神鶴岡八幡宮の分身として新たに鎌倉の西方に安置されたか。金沢文庫蔵の鎌倉時代の書籍『大仏旨趣』には、「勧進上人が八幡宮で夢のお告げを受けて、大仏を建立」と記す。

・阿弥陀如来は一般に東向きであるのに、大仏が南向きなのはなぜか・・鶴岡八幡宮の向きと統一したか。当時、盛んに信仰された善光寺の阿弥陀如来の向きにならったか。

・大仏殿は存在したのか・・1268年までには完成していたか。1369年に大風で倒壊、その後は再建されなかったか。礎石が残る。

*参考文献

清水眞澄『鎌倉大仏—東国文化の謎』(有隣新書、1979年)

馬淵和雄『鎌倉大仏の中世史』(新人物往来社、1998年)

塩澤寛樹『鎌倉大仏の謎』(吉川弘文館、2010年)

高橋慎一郎「鶴岡八幡宮の本地仏」(『鎌倉』131・132号、2022年)